魔法学校の落ちこぼれ 3

ALPHA LIGHT

梨香
Rika

アルファライト文庫

主な登場人物
Main Characters
ミランダ
カザフ王国の姫。
政略結婚からの
逃亡を計画する。
占いが得意な魔法使い。
ゲーリック
国境付近の街に出没する
怪しい魔法使い。
シラス王国を守る防衛魔法の
弱体化を狙う。
マーベリック
シラス王国の海を守る
騎士団の副団長。
ルーベンスの実家の当主。
ファビアン
フィンの村を治める領主の嫡男。
魔法学校の高等科に飛び級を果たす。
騎士を志し努力を重ねる。
ウィニー
伝説の魔法使いアシュレイが遺した
卵から生まれた風の魔竜。
フィンに育てられる。
ルーベンス
シラス王国唯一の
上級魔法使い。普段は
魔法学校を見下ろす塔で
暮らし、たまに吟遊詩人に
扮して各地を放浪する。
フィン
本編の主人公。
辺境の貧しい農村に住むチビ少年。
魔法学校で少しずつ才能を
開花させる。

一　伝説の竜

シラス王国の王都サリヴァンの早春の空に、竜が舞っている。

「あれは何だ？　まさか竜なのか？」

初めて王都を訪れた人が驚き、恐れを込めた目で空を見上げているのを見て、サリヴァンの住民は自慢げに教えてやる。

「あれはアシュレイ魔法学校の竜だよ。サリヴァンは、上級魔法使いと竜に守護された王都なのだ」

竜など伝説の生き物で現実には存在していないと考えられていたのだが、昨年、上級魔法使いであるルーベンスの弟子・フィンが竜の卵を孵したのだ。

そんな経緯を知らないサリヴァンの人々は、竜が毎日飛行訓練をしているのを見ては、上級魔法使いが見守ってくれていると感じていた。

「でも竜だなんて……人を襲ったりしないのか？」

実はまだ、自慢している本人もその点は心配しているのだが、田舎から出てきた者に見

栄を張る。

「上級魔法使いが乗っているのだから大丈夫さ！」

「そうか！　上級魔法使いなら竜を制御できるだろう」

見上げている人々は竜に乗っているのは上級魔法使いだと誤解していた。しかし実際は弟子のフィンが竜の飛行訓練をしているのだ。

『ウィニー、そろそろ魔法学校に帰ろう』

くるくるした茶色の巻き毛を飛行の風であちらこちら乱れさせたフィンは、初等科三年になって少しは背が伸びたが、まだ同級生の中では小柄な方だ。こんな子どもが竜に乗っていると知ったら、サリヴァンの民もおちおち眺めていられないだろう。

『もっと飛べるのに……』

ウィニーと呼ばれた青みがかった灰色の竜は、もっと飛びたいとフィンに伝えた。

『俺ももっと飛んでいたいけど、授業が終わる時間だから……。それにバースが、帰ってくるのを待っているよ』

魔法学校の初等科では朝一が魔法学の授業なのだが、フィンの師匠であるルーベンスは百歳をとうに超えた高齢のくせに宵っ張りの朝寝坊だ。

この数十年、シラス王国では、守護魔法使いであるルーベンスが弟子を持たないことが問題になっていた。やっと見つけたフィンを指導させるために、仕方なくルーベンスの生

活習慣に合わせて、初等科三年生の魔法学の授業は昼からになっているのだ。

フィンはウィニーと飛行訓練するのは大好きだが、他の生徒に比べて魔法の技を教えてもらえていないのが不満だ。この飛行訓練の間も同級生達は魔法学の授業中で、真っ当な師匠から魔法の技を習っているのだ。

ルーベンスからは、上級魔法を使いすぎると身体にかなりの負担がかかるし、背が高くならないと脅されていたが、同級生達がどんどん魔法の技を習得しているのを見ると焦ってしまう。

『上級魔法でなくても、中級とか初級の魔法を教えてもらえば良いんだ！　ウィニー、早く学校に帰って！』

竜舎の前で、竜の世話を担当しているバースが手を振っている。ウィニーはその横に上手く着地した。

「今日はかなり遠くまで飛行したんだな」

フィンは少しずつ飛行距離を延ばしているのだが、竜を育てるのは初めてなので、ウィニーの負担にならないようにバースが常に監視している。

バースは落ち着きのないフィンが竜を育てることを危惧して、ウェストン騎士団の鷹匠の地位を投げ捨てて魔法学校の竜舎の責任者になったのだ。

「サリヴァンの郊外まで飛んだけど、ウィニーはもっと飛びたがっていたよ」

フィンは鞍を外しながら慌ただしく今日の飛行訓練の報告をする。師匠に魔法の技を教えてくれるように要求しようと、気が急いていたのだ。

通い慣れたルーベンスの塔の階段を、フィンは二段飛ばしで駆け上る。

「フィン……いつになったら落ち着くのか？　転ばなければ良いが……」

シラス王国で唯一の上級魔法使いであるルーベンスは、魔法使いとしては超一流だが、弟子を取ったのは初めてなので師匠としては初心者だ。落ち着きのないフィンをどう指導したら良いのか悩んでいると、当の本人が荒い息で駆け込んできた。

「師匠！　上級魔法が駄目なら、初級、いや中級魔法を教えてください！　竜の卵を孵したら教えてくれると言ったじゃないですか」

今日こそは誤魔化されないぞと、緑色の瞳で睨みつけるフィンをどう説得したらよいのか。ルーベンスは困惑して、座っていたソファーから立ち上がり窓の外を眺める。

「師匠？」

フィンに急かされて「ううむ～」と唸っていたルーベンスの目に、王宮の庭の薔薇が映った。

四月になって、薔薇の蕾はほころび、桜も咲き始めている。

「そろそろ、ファビアンをカリン村に行かせなくてはなぁ」

「竜の卵を孵すんですね！」

フィンの故郷のカリン村にある桜の大木の根元には、三百年前に連合王国の侵攻からシラス王国を護った偉大なる魔法使い・アシュレイが眠っている。

シラス王国の国境線に他国からの侵入を防ぐための防衛魔法を掛けるなど、人間離れした魔力を持っていたアシュレイは若い頃に、死にかけた竜から五つの卵を託され、竜の魔力を引き継いだのだ。そして、フィンの祖先でもある。

フィンはウィニーだけでは可哀想だと思い、同じくアシュレイの血を引くファビアンに、土の魔法体系の竜の卵をルーベンスから渡してもらっていた。ファビアンは魔法学校を卒業したら、北の国境を護るノースフォーク騎士団に入団することになっているので、防衛魔法が得意な土の魔竜が側にいると安心だとフィンなりに考えたのだ。

「ファビアンを呼んできなさい」

「はい！　あっ、でも魔法の技を教えてもらう件は別ですよ」

螺旋階段に足を置きかけたフィンがくるりと振り返り、ルーベンスに一言抗議してから、ダダダッと凄い勢いで駆け下りていった。

「お前が落ち着けば、魔法の技などいつでも教えてやる。いや、落ち着けば、魔法の技など習わなくても良いのだ……」

上級魔法使いの資質に恵まれているフィンは、魔法の働きを目で見ることができる。心

身共に成長すれば、上級魔法も簡単に習得できるのだ。
「それより、上級魔法使いとしての心得を叩き込まなくては！」
魔法の技を習得するだけで上級魔法使いになれるわけではない。敵国に囲まれたシラス王国の国境線に廻らされたアシュレイの防衛魔法の維持だけでなく、各国の情勢を把握し、守護魔法使いとして王に忠告を与える立場で仕えなくてはいけないのだ。

フィンがファビアンを呼んで来たので、ルーベンスは落ち着きのない弟子をどう導けば良いのかという思案をやめた。
「ルーベンス様、私に御用だと伺いましたが……」
竜の卵が孵るという期待で興奮気味のフィンに、訳も聞かされず連れて来られたファビアンは、青いマントの乱れを直してから丁重な口調で尋ねる。
ルーベンスはこの落ち着きを見習わせたいという溜め息を押し殺して、ウィニーが桜の木の残留魔力で孵ったことを告げた。
「冬の間、竜の卵に魔力を注がせていたが、それでは卵は孵らぬのじゃ。カリン村の桜の大木に宿された残留魔力でウィニーは孵ったのだ。四月の後半になればカリン村の桜も咲くだろう。行って土の魔法体系の竜を孵しなさい」
その桜の大木の元に眠るのがアシュレイであることは、ファビアンもフィンから聞いて

いた。しかし、その残留魔力で竜が孵ったとは知らされていなかった。
ルーベンスの塔から寮への帰り道、フィンは黙り込んだファビアンの顔色を窺う。
「ごめんね、ファビアン。でも、そうかなぁと考えていただろ？」
「まぁ……」
黙っていたことを詫びるフィンにそう答えたが、真面目なファビアンはルーベンスに言われた通り、これまで毎日魔力を注いでいた。チラリと頭の隅に、ウィニーは桜の残留魔力で孵ったのではないか？　と疑いが浮かんだが、上級魔法使いの言葉に従ったのだ。
ここで腹を立てるのも大人気ないとグッと我慢して、竜の卵を孵すことに気持ちを切り替える。
「カリン村の桜は四月の終わりぐらいに満開になるのか？」
「そうか、ファビアンはサリヴァン育ちだから知らないんだね。ここより北だから桜が咲くのが遅いんだよ」
カリン村とその付近の町を治めるファビアンの父・レオナール卿は、ノースフォーク騎士団の副団長で、駐屯地のリンドンとサリヴァンを行き来して暮らしていた。中央の貴族出身の奥方は田舎暮らしに興味がないので、その子ども達も避暑に訪れる程度だったのだ。
「竜の卵を孵すには桜は満開の方が良いのかな？」
「さぁ？　でも桜の妖精がいっぱいいる方が良いと思うよ」

フィンは幼い頃から、森の桜の大木が満開になると、花から金の玉が舞い出るのが見えていた。亡くなった祖母の『フィンは桜の妖精が見えるんだね。家の祖先は魔法使いだったんだよ』との言葉に背中を押され、税金を払えず家を追い出されようとした時に、アシュレイ魔法学校の入学試験を受けてみようと思ったのだ。

魔法学校に入学できたおかげでフィンの家族は税金を免除され、家を追い出されることもなくなった。

「そうだな、桜が満開の方が良さそうだ。学校にはノースフォーク騎士団に見学しに行くと届けを出すよ」

「満開になったら知らせてね」

「わかった。伝書鳩を飛ばすよ」

ファビアンは桜が満開になる前に着きたいと、その日のうちに休暇届を出して、レオナール領に帰った。

高等科になると、卒業後の就職先への訪問や自分の領地の管理などで、魔法学校を離れることも多くなるし、ファビアンはノースフォーク騎士団に入団したいと公言していたので、誰も疑わなかった。

本当の理由を察したヘンドリック校長は、チビ竜が増えるのを楽しみにしていたが、どうせならキャリガン王太子にも竜の卵を渡してくれれば良いのにと、ルーベンスの塔を見

上げて愚痴っていた。

フィンの同級生のラッセルとラルフは、ノースフォーク騎士団の見学など夏休みでも行けるのに、桜が咲くこの時期にファビアンが魔法学校を離れたのは怪しいと感じていた。

ルーベンスが何故ファビアンに竜の卵を渡したのか？　二人はフィンが普段の生活でポロッとこぼした言葉の数々から、桜の大木の下に眠るのがアシュレイだと推察していた。領主であるレオナール一族のファビアンにも同じ血が流れているから、ルーベンスが竜の卵を渡したと考えると、筋が通る。

フィンは中等科になったら、パックとラッセルとラルフにも秘密を打ち明けて、竜の卵を渡そうと考えていた。ウィニーの飛行訓練をしているうちに、魔法学校で竜を育ててから卒業した方が良いと感じたのだ。

それに、友達に秘密を持ったまま生活を共にするのが、だんだんと重荷になっていた。今のフィンの悩みは、偉大すぎる祖先を持つのを秘密にすることと、相変わらず師匠が魔法の技を教えてくれないことだ。

竜の卵を孵したら魔法の技を教えてくれる約束の履行を求めたが「自力で孵した訳では無いだろう」とあしらわれ、新たにカザフ王国の歴史書を押し付けられただけだった。

「ファビアンの竜が孵ったら、ウィニーは兄弟かわかるのかな？　それと竜は交尾して卵を産むのかな？」

フィンは師匠から渡された、苦手（にがて）な古語で書かれたカザフ王国の歴史の本を読みながら、ファビアンからの桜が咲いたという手紙が届くのを待った。

二　ウィニーの長距離飛行

「師匠！　ファビアンから伝書鳩が届いたんです！　今週末には桜が満開になりそうだって！」

ウィニーから降りるのもまどろっこしいと、テラスから叫ぶフィンに、まったく落ち着かないなぁとルーベンスは苦笑する。

相変わらずチビのフィンだが、やっと成長期が来たので、背がぐんぐんと伸びている。ひょろりとした手足を持て余し、ウィニーから慌てて降りた途端（とたん）に蹴躓（けつまず）いて顔から窓ガラスに激突しそうになるのを、ルーベンスは風のクッションで防いだ。

「この慌て者め！　少しは落ち着きなさい！　フィン、ちゃんと武術やダンスの授業を真面目に受けているのか？　成長期で手足のバランスが悪いのはわかるが、ドタバタとされてはうるさくて仕方ない。武術とダンスで自分の身体をコントロールして、優雅（ゆうが）な身のこなしを学びなさい！」

師匠からお小言をもらってぺこりと頭を下げたが、それよりフィンはカリン村までの長距離飛行のことで頭がいっぱいだ。

「朝、ウィニーにたっぷり食べさせれば、昼過ぎにはカリン村に着くから大丈夫だとは思うんだ。ファビアンに鶏（とり）をもらえると思うから……。ねぇ、途中で休憩する時に、ウィニーには姿を消させた方が良いかな？　ファビアンがチビ竜の扱（あつか）いに慣れる時間が必要だから、着いてすぐだけど夕方に孵った方が良いよね。あっ！　一泊するならウィニーをどこに泊（と）めよう」

矢継（やつ）ぎ早に、息をするのを忘れているのではないかと心配するほどの勢いで話すフィンを、ルーベンスは「落ち着きなさい！」と一喝（いっかつ）して、一つずつ答えていく。

「ウィニーにとって初めての長距離飛行だから、途中の休憩で餌（えさ）を与えなさい。なるべく人気（ひとけ）の無い場所に降りるんだぞ。お前も少し休憩しなくてはいけないから、マイヤー夫人に弁当を作ってもらいなさい。早く着くより、安全に着くことが大事なのだからな」

確かに、週末にカリン村へ行ってすぐに帰れば、桜の大木の残留魔力で竜が孵ったと気づかれる危険性は減る。しかしそれより、無事に長距離飛行をやり遂（と）げる方が大切だとルーベンスは細かく指導した。

「チビ竜が孵ったら、ファビアンに世話の仕方を教えなくてはいけないのだから、しっかりしなさい」

ルーベンスは落ち着きのない弟子を持つと苦労が絶えないと愚痴りたくなったが、生意気で気儘な自分がトラビス師匠にどれほど迷惑をかけたか思い出して我慢した。
「ウィニーは竜舎で寝るのには慣れてきているが、知らない土地では、なるべく一緒に寝た方が良いだろう。レオナール卿の屋敷なら、ウィニーが一緒に寝られる大きな部屋もあるさ」
フィンも、寮の狭い部屋ではウィニーと一緒にいるのは無理だが、塔や広い部屋なら大丈夫だろうと頷く。
「屋敷の管理人さんが驚かないかな？」
フィンはチビ竜ならいざ知らず、子馬くらいに大きくなったウィニーを泊める管理人は目を回すだろうと心配した。
「なに、屋敷の若様がついているのだ。問題ないだろう」
ルーベンスはからからと笑ったが、レオナール卿の屋敷の管理人は庭に舞い降りた竜を見て、気絶してしまった。

三　ファビアンとチビ竜

バースの細々とした諸注意と、ウィニーの風に乗った飛翔のおかげで、途中で休憩を挟

んでも、昼過ぎにレオナール領に到着できた。
「竜だぁ～」
ファビアンが屋敷から出る前に、庭の竜に気づいた召使い達はパニックになって逃げ惑った。
「皆、静まれ！　フィンとその竜のウィニーだ！　お前達を襲ったりはしない」
竜を見た途端に気絶した管理人も、ファビアンの怒鳴り声で気がついた。召使い達は木の後ろや屋敷の中から、竜から降りるフィンを恐る恐る眺めている。
「ファビアン……ええっと、ファビアン様、できたら今日中に用事を済ませた方が良いと思うんだけど……」
ファビアンは様付けに眉をひそめたが、重大な用事の前なので文句をつけずに頷いた。
「ええっと、肉の用意はできていますか？　あと、ボロ布も持って行った方が良いですよ」
ウィニーが孵った時に腹ぺこで、慌ててハムを細かく切って与えたのを思い出し、バースの指示で挽き肉をボウルにいっぱい入れて持って行くことにしたのだ。
「このくらいの細かさで良いのかな？　あまり小さくし過ぎない方が与えやすいかと思ったのだが……」
ファビアンが見せたボウルには細切りにした肉が山盛りだ。

「十分、細かいから大丈夫だよ。ウィニーの時はハムやゆで卵を切るのが追いつかなくて、かなり雑に切ったから」

フィンは、じゃあ行こう！　とファビアンを急がせたが、馬が肉食獣の竜に怯えて暴れ、なかなか乗馬できない。

「じゃあ、先に行っておくから」

フィンが竜と飛び立つのを、召使い達は口をポカンと開けて見送った。ファビアンは興奮気味の馬を宥めて、ウィニーの後を追う。

「馬が竜をこれほど怖がるとは思わなかったな。ルーベンス様は馬車に乗ってウィニーと旅をしたはずなのに……チビ竜の時から馴らせば平気になるのかな？」

ノースフォーク騎士団に竜が馴染めるのか、ファビアンは少し不安を感じたが、半日でサリヴァンから来たという優れた機動力を活用しない手はない。どうやって馬に、竜は襲ったりしないと教え込めるのかと考えながら、カリン村を抜け、森の近くまで馬を走らせる。

「おい！　何をしているんだ」

森の側の畑を耕していたハンスは、馬が急に暴れ出したので驚いて空を見上げた。羽音を立てて飛ぶ竜を見て腰を抜かしたが、それより驚いたのは弟のフィンが乗っていたこ

とだ。

「ハンス兄ちゃん！　馬を木に繋いで～」

そう大声で言い、馬が落ちつくように空高く舞い上がるフィンとウィニー。

ともかく馬が逃げては困るし、畑を耕す鋤を付けたまま暴走したら怪我をするかもしれないので、農耕具を外して、厳重に木に縛り付ける。フィンはなるべく馬から離れた場所にウィニーを降ろした。

『お腹いっぱいだから、馬を食べたりしないのに……』

ウィニーは馬の恐怖心が理解できないと愚痴った。

『そうだけど、馬にはお前が満腹なのか空腹なのかわからないんだよ。馬を怯えさせたら、畑仕事ができなくなるから、姿を消してくれる？』

ウィニーはスルリと空気の隙間に潜り込んだ。どうにか馬が落ち着いたので、フィンはハンスとやっと挨拶できた。

「フィン！　竜に乗って来たのか？　夏休みに連れてきたチビ竜とは別の竜なのか？」

カザフ王国の魔法使いがカリン村の墓やフィンの家族に害をもたらさないよう、防衛魔法を掛けに師匠と訪れた時に、チビ竜だったウィニーを家族に紹介していた。

「お兄ちゃん、あのウィニーだよ！　八ヶ月でこれほど大きくなるとは思わなかった？」

何も見えない空間からきゅるると鳴き声がして、ハンスは姿を消しているのだと二度

驚く。
「竜に乗るだなんて……大丈夫なのか？」
ハンスは竜に聞こえないように、フィンの耳元で囁く。フィンはチビ竜のウィニーに餌をやったりしたハンス兄ちゃんですら、人を襲うと考えるのだとガックリする。
「ウィニーは俺の友達なんだ。何も危険なことはないよ！　あっ、ファビアン様が来たからもう行かなきゃ！　家には後で行くってお母さんに伝えといてね～」
竜が危険な猛獣ではないと人々に教えていかなくては！　とフィンは決意する。そのためにも、まずは竜を増やさなきゃと、馬から降りたファビアンと共に桜の大木へ急ぐ。
遠くから満開の桜が見えてくると、ファビアンは歩く速度を上げた。
「ファビアン！　先に行っては駄目だよ～」
フィンの警告に、ファビアンが何故だ？　と振り向きかけた時、ボヨヨン～と何かに跳ね返されて土の上に尻餅をついた。
「ああ～！　師匠が桜の大木の周りに防衛魔法を掛けているんだ。ちょっと待ってて」
長身のファビアンとは歩幅が違うんだよ～と内心で愚痴りながら、小走りで防衛魔法の手前まで急ぐ。フィンには桜の大木の周囲にグリーンの壁が見える。
「ええっと、俺は通れるから……ファビアン、俺にくっついて通って！」
ファビアンには防衛魔法は見えないが、フィンの指示に従ってピタリとくっついて桜の

大木に向かう。
「何故、防衛魔法を掛けてあるのだ……そうか！　アシュレイの墓を護るためか！　でも、何から？」
フィンは、後で説明するよと、桜の妖精の乱舞にうっとりとしながら答える。
「ねぇ、ファビアン？　精神を集中する呼吸方法をしてみて！」
桜の花から飛び出す金色の光が見えなくても竜の卵を孵すのに支障は無いだろうけど、できれば卵の表面に吸い込まれる様子を見せてあげたいとフィンは思った。
ファビアンは吸って吐いてと呼吸方法を繰り返し、精神を集中させる。
「ああ～！　これがフィンが言っていた桜の妖精なんだね」
ファビアンにも、金色に輝く光が微かに見えた。
「さぁ、ファビアン！　竜の卵を掲げて！」
そうだ！　ぼんやりと桜の妖精を見ている場合じゃなかったと、ファビアンはポケットから竜の卵を差し出す。
「うわぁ～！　凄い！　ファビアン！　見えるかい？」
卵に惹き付けられたファビアンには、フィンの声も聞こえていない。手の中の竜の卵をジッと見つめる。
「卵が揺れてきている！　ファビアン！　この毛布の上に置いて」

フィンはファビアンが持ってきたバスケットから、小さな毛布を出して敷いていた。ファビアンはフィンに肩を揺さぶられて我に返り、揺れ出した卵をそっと毛布の上に置く。

「フィン！　卵は無事に孵るだろうか？」

心配で堪らないと、ファビアンはフィンに尋ねる。

「大丈夫だよ！　ほら、中から殻を叩く音がするよ！」

コツコツとウィニーの時より力強い音がして、フィンはこれなら卵を叩かなくても大丈夫だろうと見守る。

「あっ！　ヒビが……」

ファビアンは卵の前に跪いて、ヒビが上下に伸び、濡れた雛が転がり出るのを見つめた。

『可愛いねぇ～！　おチビちゃん、頑張ったね！』

あの傲慢なファビアンが、はっきり言って醜い雛にめろめろなのにフィンはクスッと笑い、ボロ布を渡して濡れた身体を拭いてやるように指示する。

小さな身体としわくちゃの羽根を傷つけないように、そろそろと拭いていたファビアンは、急激な空腹感に襲われる。

「フィン！　ボウルを取ってくれ」

フィンはファビアンと雛の間に共鳴関係ができたのだと喜んで、ボウルを渡した。肉の細切りを次々と口に入れてやりながら、ファビアンは腹を壊さないかと心配する。

「なぁ、フィン？　どれくらい食べさせたら良いんだ？」

「お腹いっぱいになったら、ファビアンにもわかるよ～」

呑気そうなフィンに、ファビアンは少し不安になったが、段々と満腹を感じるようになると、食べる速度も遅くなった。

「そろそろ、満腹みたいだ……ウッ！　お腹が痛い……」

フィンは、ファビアンに水で濡らしたボロ布を渡して、お尻をちょいちょいしろと教える。

ファビアンは自分の腹が痛いのではなく、雛が便意を感じているのだと驚いて、言われるままにお尻をちょいちょいと拭いてやる。

「ウッ！　臭い～」

「ほら、ちゃんと拭いてやらなきゃ！　後は濡れた身体を乾かしてやれば良いんだ。あっ！　名前も尋ねてみてね」

ファビアンはチビのくせに臭い排泄物だなぁと眉をひそめたが、二回目からはさほど臭くないと言われてホッとする。お尻を拭いたボロ布を捨てて、新しい布で丁寧に雛を拭いてやる。

『おチビちゃんの名前はなんというのかな？』

黒っぽい雛は、うとうとしながら、金色の目でファビアンの目を見つめて答えた。

『グラウニー』

『グラウニー！　私はファビアンだよ！　お前の世話はちゃんとしてあげるからね』

ボロ布の中から、グラウニーはファビアンを見上げて、きゅるると鳴いた。

フィンは一年前にウィニーが孵った時の感動を思い出した。

『ウィニー！　チビ竜はグラウニーって言うんだよ～』

少し離れた場所にいるウィニーが、くぴくぴと嬉しそうに鳴いたような気がした。

四　グラウニーは卵を産まない？

卵から孵ったグラウニーは、お腹いっぱいになると金色の目を瞑り、すぅぴぃと微かな寝息を立てながら、ファビアンの手の中で眠ってしまった。

「さぁ、バスケットに入れて屋敷に帰ろう。あっ、卵の殻も拾って来いと、バースに頼まれていたんだ」

フィンはウィニーの孵角のペンダントで、ウィニーを呼び寄せることができたが、卵の殻は何の役に立つのか未だわかってなかった。緑がかった灰色の殻をボロ布に包んで、バスケットに一緒に入れる。

ふと、バースにチビ竜が孵る瞬間を見せてあげたかったなぁと思った。

（また、今度にしよう。それにバースなら、初めての臭いウンチも持って帰るかもね。ファビアンはきっと嫌がるよ……）

まだ効果があるのかわかっていないが、バースはウィニーの排泄物を、魔法学校の薬草園に与えている。馬やロバの排泄物も肥料として与えているので、薬草園の召使いも別に文句はつけないが、ルーベンスは関わりたくないと傍観していた。

フィンはちょこっと興味があるし、竜のために鷹匠を辞めたバースには卵から孵る瞬間を見せてあげたいと思いながら、桜の木をもう一度眺める。

薄いピンク色の桜の花から金色の光が飛び出して、チラチラと風に散る花びらと乱舞している。

「わぁ～綺麗だなぁ！　師匠にも見せてあげたかったなぁ」

桜の一枝をナイフで切って、お土産としてサリヴァンへ持って帰ろうかと思ったが、考え直してその場所を去った。

森から出たファビアンは、繋いでいた馬に乗り、グラウニーが寝ているバスケットをフィンから受け取った。

「少し家に寄って行きます。先に帰っていてください」

フィンは今ならグラウニーが寝ているので、家に寄って家族と少し話す時間があるだろうと考えたのだ。

「早く来てくれよ。グラウニーが起きたら、餌をやらなきゃいけないんだよな……」

チビ竜を育てる初心者のファビアンに、心配しなくてもグラウニーが起きる前に帰ると約束して、先に帰らす。

「ハンス兄ちゃんは、ウィニーが家畜を驚かすのを喜ばないだろうなぁ」

自分の家が、他の家から離れた森の近くで良かったとフィンは初めて思いながら、家畜が驚かないように十分な距離を取ってウィニーから降りた。

「まぁ、フィン！　ハンスから竜に乗ってきたと……」

母親のメアリーは少し遠くにいる竜に驚いて、口に手を当てて黙った。

「お母さん、ただいま。ほら、あのチビ竜だったウィニーだよ。ウィニーは俺の友達だから、人を襲ったりしない。賢いし、とても優しいんだ、大丈夫だよ。それより喉が渇いたよ、お茶くれない？」

フィンの言葉でメアリーは安心して、遠路はるばる帰ってきた息子にハーブティーをいれてやる。ハンスも家に竜が舞い降りたのを見て、ウィニーを避けて少し大回りして帰ってきた。

三人でお茶をしながら近況を話し合うが、どうしても竜の話題が多くなる。フィンはまずは家族から、竜は怖くないし、人を襲ったりしないと教えていかなきゃと思い説明した。

「お母さん、ハンス兄ちゃん、そろそろお屋敷に行かなきゃ。ファビアン様がチビ竜をちゃんと世話できるか不安だもの。それに屋敷の召使い達は、竜を怖がっているから、説明しておきたいし……」

慌ただしい滞在になったフィンを、メアリーは抱きしめて額にキスをし、健康だけは気をつけるんだよ！　と見送った。竜に乗る息子が、自分達とはかけ離れた人生を送っているのだと、メアリーは胸に少し寂しさを感じながら、小さくなっていく竜をいつまでも見ていた。

「フィン！　よく来てくれた！　召使い達に、竜は人を襲わないと何回言っても信じないのだ」

雛のグラウニーでも怖がって側に寄らなかった召使い達は、空から舞い降りたウィニーにまたも逃げ惑う。

「ひぇ～！」と、慌てて物陰に隠れた召使い達に、フィンとファビアンは困り果てた。

「ずっとこんな調子なのだ！　管理人に餌を用意させようとしたが、あいつは部屋から出てこない」

領主の若様の命令でもチビ竜に近づきたくないのか、とフィンは呆れた。

「まぁ、そのうち慣れますよ……。ところで、ウィニーをサロンに入れても良いですか？庭に居させたら、召使い達が木の陰から出てこないでしょう」

部屋に籠もった管理人がここにいたら、とんでもない！　と拒否していただろうが、ファビアンとフィンは竜にめろめろなので、サロンの掃き出し窓を開けて、ウィニーを中に入れた。

ウィニーは小さな火がついている暖炉の前に置かれたバスケットに興味津々だ。

『ねぇ？　グラウニーを見ても良い？』

フィンとファビアンは召使い達の過剰な反応で忘れていたが、ウィニーにとっては初めての仲間なのだと、バスケットを開けてやる。チビ竜のグラウニーはまだ卵から孵ったばかりで、羽根もクシャクシャと伸びておらず、丸まって寝ている姿はトカゲみたいだ。

『わぁ～小さいね～』

ウィニーは起こさないように、小さな声でくぴくぴと鳴いた。グラウニーは眠っていても、同族を感じたのか、尻尾をぴくぴくさせた。

『ウィニー、チビ竜が起きる前に食事にしよう』

フィンは召使い達がパニックになりそうなことを、平気で口にした。

「おいおい、屋敷の召使い達が、全員逃げ出してしまうぞ。まぁ、私の言葉を信じない奴らはクビにしてもかまわないが……」

フィンは肩を竦めて、無人の台所からハムの塊を取ってきた。

「さぁ、ウィニー！　庭で食事にしよう！」

サロンの中なら召使い達の目に触れないのにと、ファビアンは怪訝に思ったが、フィンに何か考えがあるのだろうと思い、任せる。もう大きくなったウィニーにはハムを丸ごとやっても、足で押さえながら口で咬みちぎって食べられるが、今回はいちいちナイフで切って食べさせる。

「へぇ～、馴れているんだなぁ」

召使い達はフィンの手からハムをもらって食べているウィニーを見て、少し落ち着きを取り戻した。その手際の良さにファビアンは感心した。

「そういえば、フィンは偉い上級魔法使いの弟子だったな……」

部屋からウィニーの食事の様子を見ていた管理人は、このままでは地位が脅かされると勇気を振り絞った。管理人が正気に返って、屋敷は平静を取り戻した。

グラウニーが目を開けた時、ボウルにチビ竜が何頭も養えるほどの肉が山盛りになっていた。お腹いっぱいなら人を襲わないだろうと、管理人が命じて、料理人もそれに従ったからだ。

ぐるるっぴ！　とグラウニーが空腹を訴える前から、ファビアンは猛烈な空腹感に襲われていた。

『グラウニー！　ほら、お食べ』
フィンとウィニーは、ファビアンが慣れない手つきでグラウニーに餌をやるのを見守っていた。
『ねぇ、ウィニー？　グラウニーは兄弟なの？』
フィンの問いに、ウィニーは首を傾げる。
『違う種類みたい……。多分、グラウニーは卵を産まない。あっ、フィンと一緒だよ！』
人間は卵を産まないよ！　と笑いかけたフィンだが、ハッと意味がわかった。
『ウィニーは卵を産むんだね。そして、グラウニーは卵を産まないんだ！　わかったよ！ウィニーは雌で、グラウニーは雄なんだ！』
ウィニーは雄と雌の意味を考えて、そう言うんだと頷いた。
（雄と雌なら、いつかは交尾するのかな？　でも兄弟だったらまずいよね……）
物思いに耽るフィンだったが、グラウニーの世話を焼いているうちに、思案していたことを忘れてしまった。グラウニーの排泄物を灰掻きでファビアンにすくわせて、トイレに捨てに行かせる。
（今日くらい、代わりにやってあげても良いけど、これから日に何回もしなくちゃいけないんだから、早く慣れなきゃね）
ファビアンは、騎士団に入団したら見習い騎士として馬の世話もさせられるのだから、

チビ竜の排泄物の世話も修業の一環だと受け入れた。
グラウニーはお腹がいっぱいになると、部屋の中にいるウィニーによたよた近づいた。ウィニーはチビ竜を踏まないように、ジッと動かずに金色の目でグラウニーを見つめる。
『グラウニー、私はウィニー』
グラウニーはウィニーの名前を呟くと、ファビアンの元によちよち帰り、抱き上げられると安心したように目を瞑った。
「どうやら、グラウニーは雄みたいだよ。ウィニーは雌だけど……まぁ、大きくなってから考えよう」
グラウニーが空腹で目を覚ますのに備えて、ファビアンとフィンは毛布を被ってサロンの長椅子で眠ることにした。

五　サリヴァンへの珍道中

夜中に一度起きて餌をやった以外は、ファビアンもフィンもソファーで熟睡した。
屋敷の管理人は若様がこれからは竜でやって来るのかと鬱々とした気分になったが、職を辞す考えは毛頭無いので、料理人に朝ご飯を用意させたりして気を紛らわす。

「グラウニーはまたお腹が空いたみたいだ」
ソファーの下でぴぃぴい鳴いているグラウニーに起こされて、ファビアンはボウルから餌を与えた。
『私もお腹が空いたよ』
ウィニーはチビ竜のグラウニーの食欲に刺激されて、空腹を訴える。
『グラウニーはこんなに食べられないから、後でもらってあげるよ』
チビ竜には食べきれないほどの細切り肉がボウルにあったので、グラウニーが食べ終わった後でウィニーも十分満腹になった。
ウィニーが外で排泄をして、後ろ足で土に埋めるのを、ファビアンは躾け済みで良いなぁと羨ましがったが、グラウニーと替えたいとは一瞬も頭に浮かんだりはしなかった。
管理人が扉の外から、朝食の用意ができましたと恐る恐る告げるのを聞いて、ファビアンはやれやれと溜め息をつく。
「サリヴァンまで、グラウニーはバスケットの中で大人しくしてくれるかな？　屋敷の召使いですら恐ろしがるのに、宿屋でグラウニーのことがバレたら困るぞ」
フィンは、ウィニーの時は師匠と二人だったし、上級魔法使いが部屋に入るなと命じていると嘘を言って、食事も部屋に運んで食べたことを思い出した。
「ウィニーは起きている時は、バスケットの中にいるのを嫌がったんだ。羽根をバタバタ

と動かすから、宿屋でバレないか冷や冷やしたなぁ」
屋敷の管理人は竜に関わりたくないと、先に朝食を済ませていたので、ファビアンとフィンは考えていたより普通の人々が竜を怖がっていると気づいて困惑していた。
「サリヴァンまでは馬で何日かかるの？　馬車よりは早いよね」
二頭の竜の空腹に刺激されて、二人はたっぷりと朝食を食べながら、どうしたらグラウニーを安全に早く魔法学校に連れて行けるか話し合う。
師匠にシラス王国の早馬を使う割り札を貸してもらっていたフィンは、ファビアンの二頭の馬を乗り換えながら行くよりは早いかな？　と差し出す。
「これは王家の早馬の割り札だろう。竜は貴重だけど、ここで使って良いのかな？」
フィンには区別は付かなかったが、ファビアンは緊急事態に備えてある早馬を使うのを躊躇う。
「早馬ならサリヴァンに何日で着くの？」
「私が不眠不休で早馬を飛ばしても、グラウニーは途中でお腹を空かせるから、何回も休憩を取らなきゃいけない。ノースフォーク騎士団からの早馬が、サリヴァンまで二日で着いたという記録があるけど、馬は潰れてしまったそうだよ」
敵国の侵入などの緊急事態ではないし、第一グラウニーが大人しくバスケットの中にいてくれるとは限らないので、ファビアンは早馬の割り札を返した。

「馬車の中なら、グラウニーをバスケットの外に出してやれるからな」
時間がかかっても、その方が確実だし、宿屋では御者に食事を部屋に運んでもらえば良いという結論に達した。しかし、そう上手く話は進まなかった。
「俺は竜と旅をするだなんて、嫌です！」
ファビアンの命令に応じる召使いが誰もいなかったのだ。
「小父さんが去年、師匠と俺をサリヴァンに送ってくれた時、ウィニーも一緒だったんだよ。何も不都合は無かっただろ？」
フィンは顔馴染みの御者を説得するが、真っ青な顔で俯いて、勘弁してくださいと繰り返すばかりだ。
『ファビアンとグラウニーを乗せて帰れば良いんだろ？』
旅立ちの支度をしたのに、なかなか出発しないフィンを待ちくたびれたウィニーが、細身のファビアンなら大丈夫だと言い出した。
『ええ～？　だって、サリヴァンまで遠いよ』
『グラウニーを早く魔法学校に連れて帰った方が良いんだろ。それに、こんなに騒がれたら、グラウニーは神経質になっちゃうよ。私の背中の上ならバスケットに入れなくても大丈夫だし』
ウィニーも眠っている時以外は、バスケットに閉じこめられるのが嫌いだったので、チ

ビ竜に同情したのだ。

『一度、試してみよう！　駄目なら、グラウニーだけ俺が魔法学校に連れて帰るよ』

ファビアンはグラウニーと離れがたく感じたが、二人乗りが無理なら仕方ないと頷く。

ファビアンに竜の乗り方を教えて、フィンはバスケットに寝ているグラウニーを渡した。

「ファビアン？　バスケットを鞍に括り付けるけど、狭くない？　この鞍は二人乗り用じゃないんだ……本来は鞍の後ろは荷物置き場だから、少し窮屈かもね」

後ろにバスケットとファビアンが乗っているので、フィンもいつもよりは狭く感じる。ファビアンが鞍に荷物を括り付ける突起をちゃんと持っているのを確認して、ウィニーに飛べるかなと質問する。

『行きほどは長距離は飛行できないかも、でも、休憩しながらなら大丈夫だよ』

フィンがもっと成長していたら、まだ成竜になっていないウィニーには二人乗りは無理だったかもしれない。

ウィニーは風の流れをつかんで、空中に舞い上がった。

『うわぁ～！　空を飛んでいる』

ファビアンにとっては初めての竜での飛行なので、フィンはちょくちょく休憩しながらサリヴァンに向かおうと考えた。

『ウィニー？　大丈夫？』

『風に乗っているから、さほど疲れないよ。グラウニーが目を覚ますまでに、少しでも距離を稼ぐよ』

フィンもウィニーが羽根で飛行しているのではなく、風に乗っているのが見えた。

ファビアンは初めての飛行で、鞍を握る手に汗をかく。しばらくするとグラウニーが目を覚まし、空腹を訴えた。

『フィン！　グラウニーが起きたよ』

フィンは、卵から孵って数日は目を覚ますたびに餌やりタイムだったと、人気のない場所にウィニーを降ろした。ファビアンがグラウニーに餌をやっている間に、フィンはウィニーの鞍を外して、身体に負担がかかっていないか調べる。

『ご苦労様、ブラッシングしてあげるよ』

竜にブラッシングは必要ないかもしれないが、鞍を置いた後はブラッシングしてやると気持ちが良さそうだとバースに聞いていたので、ずた袋からブラシを出してゴシゴシこする。くぴくぴとウィニーは気持ち良さそうに目を閉じて、暫しのブラッシングタイムを楽しんだ。

ファビアンもグラウニーのお世話キットを入れたずた袋からボロ布を出して、ちょいちょいとお尻を撫でてやっている。その様子を見て、フィンはこれならちゃんと世話できるだろうと安心する。

『さぁ、出発しよう！　ウィニー、しんどくなったら、すぐに言うんだよ』
『大丈夫だよ。グラウニーの食事に合わせて休憩を取れば疲れないよ』
行きと違いスローペースな飛行になったが、問題は休憩する場所探しだ。なるべく街を避けて飛行していたが、午前中だけで三度もグラウニーの餌休憩に降りなくてはいけなかった。
お昼は山に寄り道して、みんなゆっくりと休憩を取ることにした。山の上なのに開けた草原で、休むのに適していた。二人を乗せて長距離飛行しているウィニーに、フィンはいつもより沢山の餌をやった。鶏を足で押さえて食べているウィニーの横で、フィンとファビアンはグラウニーに餌をやりながら、自分達も昼食をパクパクと食べた。
「竜を怖れないようにさせないと……」
フィンは食べ終わって、草の上に寝っ転がった。春の淡い空を眺めながら、師匠が作曲した『竜三部作』を広めたら、少しは竜を怖がらなくなるかな？　とフィンは考えていた。
ファビアンはグラウニーの排泄の世話を終えて、こちらも竜での飛行は初めてなので、少し疲れてフィンの隣に横たわる。
「人間は竜を見慣れたら、怖がらなくなるさ。私は馬に竜を怖がらせない方が難しいと思うな」
竜がノースフォーク騎士団に馴染めるのか、ファビアンは頭を悩ませている。

「そうかぁ……でも、師匠の馬はウィニーを怖がらないよ。多分、チビ竜の頃から知っているからだろうけど……」
フィンはうとうとしながら何気なく答えた。
「そうか！　チビ竜の時から馬に慣れさせたら良いんだ！　グラウニーをバスケットに入れて屋敷に帰った時、馬は怖がっていなかった！　ノースフォーク騎士団の馬達にも、グラウニーがチビのうちから会わせておけば慣れるかもしれない」
興奮しているファビアンをよそに、フィンは一眠りした。ウィニーも疲れた上にお腹いっぱい食べたので、うとうとする。
ファビアン一人が起きていたのだが、ノースフォーク騎士団の馬達にグラウニーを受け入れてもらう方法を夢中で考えていたので、山羊や羊を連れた集団が近づいてくるのに気づくのが遅れた。
フィンがウィニーを降ろした草原は、下の村の牧場だったのだ。そろそろ春も深くなったので、山羊や羊を上の牧場に連れて来た村人は、竜が寝そべっているのに腰を抜かした。
「竜……竜だぁ～」
こけつまろびつ山を下る村人に山羊や羊も興奮して、我先にと駆け出す。
「フィン！　何だかヤバいぞ！」
フィンはファビアンに揺り起こされるまでもなく、山羊や羊が暴走している騒音に驚い

て飛び起きた。

「あちゃ～！　ここは山の牧場だったんだね。山羊や羊が逃げたら、村人は怒っちゃうよ。確か師匠が、馬を落ち着かせる技を使っていたんだけど……」

ルキアの街に潜入した時に師匠が使った技を思い出して、山羊や羊達の心に平安を取り戻させる。

「さぁ、これで山羊や羊は逃げないよ。俺達が飛び去ったら、村人が連れて帰るだろう」

長居は無用だと飛び立ったフィン達だが、すぐにグラウニーの餌休憩をしなくてはいけなかった。

「ちょっと多めにあげたら、お腹壊しちゃうかな？」

サリヴァンに近づくにつれて、人気のない場所を探すのが難しくなってきた。

「フィン、今度からは協力してくれる屋敷を確保しといた方が良いぞ。離宮を使わせてもらっても良いかもしれない」

フィンには思いつかなかったが、離宮は各地方にあるとファビアンは説明してくれた。

「うう～ん、でも……」

キャリガン王太子に竜の卵を渡さないのに、離宮を使わせてもらうのは図々しいような気がして、フィンは躊躇う。フィンが乗り気でないのに気づいて、農民出身なので遠慮をしているのかとファビアンは考えた。

立ち読みサンプル はここまで

「竜はシラス王国の宝だよ！　今だってサリヴァンの人達は、上級魔法使いと竜に護られていると感じている。これから竜が増えたら、休憩する場所を確保しなければいけない」

ファビアンの意見は正論だけど、フィンはやはり気兼ねしてしまう。

「師匠に相談してみるよ」

答えを先延ばしにしたフィンに、ファビアンは少し苛ついたが、ルーベンスに任せるしかないかもと思い直し、ウィニーとサリヴァンを目指す。

行きはお昼までに着いた距離を、夕方までかかって魔法学校に到着した。

『ウィニー、お疲れ様』

竜舎でフィンが鞍を外していると、バースがやって来て、二人乗りで帰ったのかと叱り出した。

『お腹すいた』

ところが足元でぴすぴすと鳴くグラウニーを見た途端、バースは説教を後回しにして、走って餌を持ってくる。

ルーベンスも塔から下りて来て、グラウニーと言うのかと、よしよしと餌をやる。フィンはグラウニーの世話はファビアンと師匠に任せて、ウィニーに餌をやったりブラッシングをしてやる。

バースはウィニーの羽根に問題は無さそうだと確認して、まぁフィンとファビアンなら、